

富山大学人文学部平成 29 年度卒業論文

子供達の「遊び場」から国宝へ

—富山県高岡市 国宝瑞龍寺の観光地化に向けた取り組み—

人文学部人文学科

社会文化コース社会学分野

学籍番号 11410152 牧口 奈央

<目次>

第1章	問題関心	・・・1
第2章	先行研究	・・・2
第1節	瑞龍寺について	・・・2
第2節	観光振興を成功に導くための条件	・・・5
第3節	岡山県旧勝山町の事例	・・・7
第1項	岡山県旧勝山町の観光地づくりについて	
第2項	「町並み保存地区」における観光関連事業	
第4節	先行研究のまとめ	・・・12
第3章	調査概要	・・・13
第4章	瑞龍寺ライトアップ	・・・17
第1節	瑞龍寺ライトアップとは	・・・17
第2節	ライトアップ実施の経緯	・・・18
第3節	ライトアップに関わる組織	・・・21
第1項	実行委員会の構成	
第2項	各団体の動き	
第5章	分析	・・・26
第1節	組織	・・・26
第1項	機能的な役割分担	
第2項	組織の変遷	
第3項	地域住民の理解	
第2節	観光資源としての寺	・・・30
第1項	「遊び場」から「観光地」へ	
第2項	文化財としての瑞龍寺	
第3節	駅南地区の特徴	・・・32
第4節	観光地化へ向けた各団体の取り組み	・・・33
第1項	高岡南部地域活性化推進協議会の取り組み	
第2項	瑞龍寺夢参道まち衆会の取り組み	
第3項	下関校下活性化行事委員会の取り組み	
第4項	富山県福祉旅行センターの取り組み	
第6章	考察	・・・36
第1節	勝山との比較	・・・36
第2節	観光振興を成功に導くための条件との照合	・・・37
第3節	まとめ	・・・40
注釈		・・・41

第1章 問題関心

近年、日本では三大都市圏への人口の集中が強まる一方で、地方では人口の減少・少子高齢化のスピードが加速している。そのような地域では、定住人口の減少による地域経済の縮小が元となって、地域の賑わいが失われていくだけでなく、行政サービスの水準の低下や公共交通機関の撤退・縮小など生活利便性が低下することが問題となっている。

そのような状況下において地方での観光振興は、交流人口の増加によって地域に高い経済波及効果や雇用の創出効果を及ぼし、また、まちの賑わいを取り戻したり、まちの魅力を再発見するきっかけになると考えられている。つまり、観光振興は地域おこしのための重要な戦略となってきている。そのため、地方では観光振興を地域活性化に活かそうと、それぞれ独自の取り組みを展開しており、それらの取り組みは地域によって多様化、複合化してきている。

本研究で取り上げる富山県高岡市も近年人口が減少し続けている都市のひとつである。高岡市には高岡大仏や重要伝統建造物群保存地区に指定されている山町筋及び金屋町、国の重要有形・無形民俗文化財に指定されている御車山祭りなど多くの文化財や伝統行事がありそれらを利用した観光振興で交流人口の増加を図っている。一方で、これら多くの文化財は高岡駅の北側にあり、南側である駅南地区の主な観光名所は1997年に近代禅宗様建築の代表作として山門・法堂・仏殿の3つが国宝に指定された寺院瑞龍寺と、前田利長公墓所のみである。駅南地区も、駅北側と同じく人口が減少しており少子高齢化も進む地域であるが、平成27年の北陸新幹線の開通によって、在来線の通る高岡駅と新幹線が通る新高岡駅を結ぶエリアとして、ますます観光振興による地域おこしが重要視されてきている。

本研究では、高岡駅の南側（本稿では駅南地区と呼ぶ）、とりわけ瑞龍寺周辺を中心として、観光を利用した地域おこしがどのようになされているのかについて考察する。筆者は、駅南地区の大きな観光イベントの一つで、春、夏、冬の年に3回開催されている「国宝瑞龍寺ライトアップ」に焦点を当て、関係者へのインタビューを通してその実態を明らかにした。本稿では、それらの分析を通して、駅南地区の観光振興の可能性や課題を提示していく。

第2章 先行研究

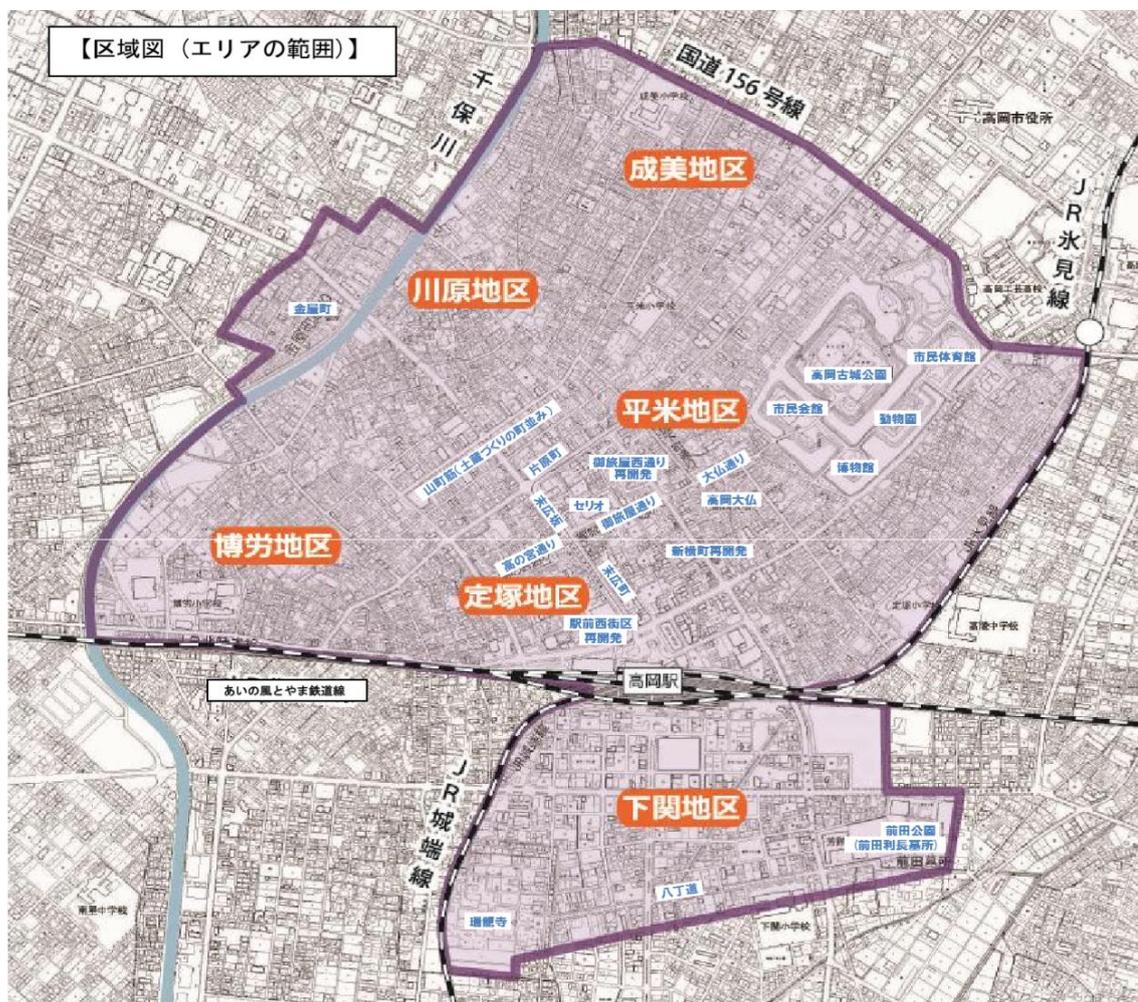
第1節 瑞龍寺について

瑞龍寺は、富山県高岡市にある曹洞宗の仏教寺院である。慶長14年(1609年)に当時「関野」と呼ばれていた荒野に城を築き高岡を開いた加賀藩二代藩主前田利長公の菩提を弔うため、三代藩主前田利常公によって建立された。瑞龍寺の公式ホームページによれば、その造営には正保年間から、利長公の五十回忌の寛文三年(1663)までの約二十年の歳月がかけられたという。当時、寺域は三万六千坪、周囲に壕をめぐらし、まさに城郭の姿を想わせるものがあった。瑞龍寺は、加賀藩百二十万石の財力を如実に示す江戸初期・禅宗に典型的な建物群であり、江戸時代初期の禅宗様建築の代表作として高い評価がされていることから、仏殿、法堂、山門が国宝に、総門、禅堂、高廊下、回廊、大茶堂が重要文化財に指定されている。

また、瑞龍寺の正門をやや東北に向けて進むと、二代目藩主利長の冥福を祈って三代利常が三十三回忌にあたる正保三年(一六四六)に建てた前田利長公墓所がある。利長墓所は国の史跡の指定を受けている。そして、その利長公墓所と瑞龍寺を結ぶのは、約870mの参道「八丁道」である。八丁道は昭和62年から平成2年にかけて歴史的な景観を再現することとして全面的な整備事業が行われた。

また、瑞龍寺がある高岡駅の南側の地域は、高岡市の中心市街地活性化基本計画の指定地域になっている。中心市街地活性化基本計画とは、平成18年に国が中心市街地活性化法を改正したことに伴い、平成19年から高岡市が策定した計画である。高岡市ではこれまでに3つの基本計画を制定し、国からの認定を得て中心市街地の活性化に取りくんでいる。その要素となる商業・業務機能、歴史・文化資源、居住環境、公共交通、都市福利施設等、すべての要素が勘案できる最小限の範囲を中心市街地と定めることが適当であると考え、それらを踏まえた6つの地域が計画の指定区域として認定された。そのうち駅南側で指定されている地域は下関地区のみであり、残りの5つはすべて駅北にある。中心市街地活性化基本計画における下関地区とは、図2-1にあるように南西側は国宝瑞龍寺まで、南東側はホームセンタームサシ高岡駅南店と、前田利長公墓所を含めた地域まで、南側は瑞龍寺までの範囲である。

図 2-1 第三期中心市街地活性化基本計画の指定区域



第 3 期高岡市中心市街地活性化基本計画 59 ページ 【区域図 (エリアの範囲)】 を使用

駅北側 (以下、駅北地区) には高岡大仏や山町筋、金屋町、高岡城跡など古くからの歴史文化遺産が数多く残されているほか、毎年 5 月 1 日に開催される御車山祭りや七夕祭りも駅北で行われている。また、昔からの商店街もいくつか形成されている。

一方で、下関地区にある主な文化遺産は国宝瑞龍寺と前田利長公墓所のみで、駅北側に比べても文化遺産は少なく、祭りもほとんどない。反面、駅の南側には新幹線の駅ができ、大型商業施設も進出している。また、過去の区画整理事業とともに駅至近という好立地条件等もあいまって、民間主導によるアパート、マンション等の集合住宅の建設が進んでおり都市型居住が進んでいる地域とされている。そのため、中心市街地活性化基本計画での指定区域のうち、駅北の区域はすべて高岡市のまちなか居住支援の対象となっているのに

対し、下関地区は支援の対象としては指定されていない。

本研究ではこの中心市街地活性化基本計画における下関地区を駅南地区と呼ぶことにするが、駅南地区は駅北地区に比べて観光名所が極めて少ないという点や高岡市のまちなか居住支援の対象になっていないという点で、駅北地区とは違った特徴を持った地域であることが分かる。

第2節 観光振興を成功に導くための条件

瑞龍寺周辺の観光振興について深く考察していくにあたり、ライトアップをはじめ周辺での観光客誘致に向けた取り組みが成功に繋がっているのかという点を明らかにするために、観光振興が成功している先進地域に共通している条件と駅南地区との比較を通して議論していきたいと筆者は考える。そこで、この節では、魅力ある観光地づくりについて研究し、その基礎理論と実践的指針を提示している長谷(2003)が提示する観光振興を成功に導くための10項目の条件について取り上げる。長谷は、『新しい観光振興』の中で、観光振興が成功している先進地域の事例を検討し、それらの地域に共通しているのはどのような条件かについて明らかにした。

まず、長谷によると、観光振興とは「地域住民、地方自治体、観光関連団体、観光企業またはそれら幾つかの連携したものが主体となり、主に観光地の開発、観光イベントの開催、土産品（特産品）の開発により観光客を創造、あるいは維持して、地域経済を活性化するとともに、地域文化を発掘・創造し、地域住民に生きがいや誇りなどをもたせる地域づくり」であると述べている。さらに、観光振興を成功させる条件として長谷は「リーダーの存在」、「地域住民の理解と協力」、「地域資源の発見と活用」、「アイディアの収集」、「娯楽性の要素の重視」、「ホスピタリティの提供」、「リピーターの考慮」、「地域内自給率の向上」、「観光マーケティングの知識」、「専門家の活用」の10の項目を挙げている。上記10の条件について、以下で詳しく説明する。

まず、「リーダーの存在」であるが、長谷は観光振興を推進していく上で必要なリーダーの人物像を、地域に対して誇りと情熱をもって未来への展望を抱き、卓越した創造力と果敢な行動力を兼ね備えた粘り強く尊敬される人が望ましいと分析している。

次に「地域住民の理解と協力」については、観光振興を行う主体が、地域住民に対して何のために行うのか、どんな利益が得られるのかなどをよく説明し、理解と協力を求めることが前提であると述べる。

「地域資源の発見と活用」については、当該地域の自然、生活、歴史、文化、産業などの特異な資源を発見・活用することが観光振興において重要になると述べた上で、特にこれからの時代では、今ある観光資源に新しい付加価値を付与したり、資源を新視点から捉えなおしたり、また資源の使い方を変えたりするなど、斬新な発想で地域資源を活用することが求められると述べる。

「アイディアの収集」については、成功事例や先進地事例にもとづいた手法ではなく、斬新な方法で観光振興を進めるべきであり、そのためには地域住民だけではなく、広く一般にもアイディアを募集したり、創造的アイディア開発方法を活用したりなどしてアイディアを収集することが大事だと述べる。

「娯楽性の要素の重視」については、立派な観光施設を開くことだけにとどまらずに、楽しさ、面白さ、遊び心などのエンターテインメント性とアミューズメント性という要素を取り入れ観光客を集めることが必要不可欠であると分析する。

「ホスピタリティの提供」については、観光ビジネスに携わる者だけでなく、地域住民も観光客に対して自宅にお客様を迎え入れるような気持ちで接し、心からのもてなしを提供することが大切であると述べる。そうすることで、観光客は当該観光地を訪れて本当によかったという気持ちになり、心に残る満足感が得られると述べる。

「リピーターの考慮」については、持続的発展のために、新たな魅力ある観光施設の建設、埋もれている観光資源の発掘、新しい観光イベントの開催、新視点からの魅力の再発見など、観光客が再度訪れたいくなるような観光地づくりを新たに観光振興を始める当初から検討しておくべきであると述べる。

「地域内自給率の向上」については、観光振興にともなって発生する需要を当該地域内でできるだけ賄うよう尽力することが大切であると述べる。地域外への流出をできるだけ少なくして地域内の自給率を向上させることで当該地域における経済効果を望むことができる。そのためには、地方自治体などが地元業者間に入り、認識改善、経営指導、取りまとめを行うことが重要であると分析した。

「観光マーケティングの知識」については、観光振興で成功している地域を見ると、たとえその主体が観光マーケティングの知識をもたなくても、結果として観光マーケティングを展開していることが理解できると述べた。それゆえ、地方自治体の職員や地域住民の代表者など、観光振興の主体に観光マーケティングの教育・研修を急がなければならないと述べる。

最後の項目「専門家の活用」については、すぐれた専門家に検討委員会に参加してもらい、助言や指導を受けるとともに、ときには利害対立の調整役割を担ってもらうことが必要になると述べる。その上で、観光振興を行う主体の中で、観光の専門家と自称する人は多いが、観光振興の理論と実践に精通した専門家の数は少ないことを問題として挙げている。

第3節 岡山県旧勝山町の事例

他地域の観光スポットとして有名な寺や国宝の寺は、国宝になる前から寺の門前にお店があったりなど観光地としてある程度整備されている所が多く、その点で、国宝に指定された後から観光地として注目されるようになった瑞龍寺の観光振興は他にあまり例の見られない事例であると筆者は考えた。そこで、本稿では元々は観光地ではなかった場所が観光地として注目されるようになったという点で、瑞龍寺と共通している県の旧勝山町の観光振興の事例を取り上げる。勝山町が観光地として成り立つまでに、どのような過程を踏んできたのかを以下で詳しく見ていくことにする。

第1項 岡山県旧勝山町の観光地づくりについて

岡山県旧勝山町（以下、勝山）は、岡山県北部に位置した町で、2005年に近隣町村との合併により真庭市となった。勝山・町並み保存地区のホームページによると、勝山は古くは出雲街道の要衝として繁栄し、土蔵はもちろん、白壁や格子窓の古い町並みが残ることから、昭和60年に岡山県発となる「町並み保存地区」に指定された。昔ながらの酒蔵に、旧家、武家屋敷といったノスタルジックな建物に加え、古民家、蔵などを活用した工房、カフェ、ギャラリーなどが軒を連ね、歩くだけでも楽しい趣をかもしていることが特徴であるとホームページに記載がある。

市街地地区の観光振興は、1985年に岡山県の「町並み保存地区」として指定されたことから始まった。「町並み保存地区」は歴史の息づく町並みや史跡等を町づくりの中に生かしながら保存・修復する地域を「街並み保存地区」として指定し、整備の促進を図る県単独の事業であり、勝山地区はその事業で最初に指定された地区である。この指定に基づき、勝山地区では2回にわたって「町並み保存地区整備事業」と呼ばれるハード面での事業行われている。1回目の整備事業では、500m四方の区域が指定され、その中の重要性備蓄について、事業が進められた。事業期間は5年間で、年間概ね2000万円の事業を行った。2回の整備事業は平成5年度に「再整備事業」として、5年度から9年度まで家並みを中心とした整備事業が進められた。地域の範囲や事業の概要は1回目と同様であり、平成5年度においては寄贈された民家を修復し、観光客の休憩や軽食喫茶の場としての整備を行った。以下は、それぞれの整備事業で行った事業の内容や主体、期間に関する表である。

表 2-2 第 1 次町並み保存地区整備事業実績

(昭和60年度～平成元年度)

事業種目	事業主体	位置	事業内容等	60	61	62	63	元
町並み保存整備事業	勝山町 (民間)	山本町～ 下町	町並み修復 (重点整備地区)					
資料館整備事業 (武家屋敷館)	勝山町	旦西	渡辺屋敷 (武家屋敷館) の整備 資料館展示施設の整備					
資料館整備事業 (郷土資料館)	勝山町	中町	郷土資料館の整備					
高瀬舟発着場跡地保 存整備事業	勝山町	旭川東岸	石積みの修復・復元 排水路整備					
周辺環境整備事業	勝山町	随所	環境整備 散策道整備					
案内看板等設置事業	勝山町	随所	案内板 (地図入) 説明板 案内標識					
駐車場整備事業	勝山町	旦西	観光客専用駐車場の整備 (舗装) 438平方 花壇整備					
公衆便所設置事業	勝山町	旦西	公衆便所設置 木造平屋					
詩碑等保存整備事業	勝山町	随所	詩碑, 出雲街道道標等修復 説明板の設置					
橋梁整備事業	勝山町	中橋	中橋整備 (橋桁塗装替え364平方) 欄干改修整備84m×2					

捧(2006)より引用

表 2-3 第 2 次町並み保存地区整備事業実績

(平成 5 年度～平成 9 年度)

事業種目	事業主体	位置	事業内容等	5	6	7	8	9
町並み保存整備事業	勝山町 (民間)	山本町～ 下町	町並み修復 (重点整備地区)					
郷宿高田邸修復事業	勝山町	中町	郷宿高田邸の修復 (名称：郷宿)					
資料館整備事業	勝山町	中町	郷土資料館の整備					
高瀬舟発着場跡地整備事業	勝山町	中町～下町	石積みの修復・復元					
駐車場整備事業	勝山町	山本町	観光客駐車場塀新設 観光駐車場照明灯設置					
のれん製作事業	勝山町 (民間)	山本町	のれん製作 16枚 28枚					
街路灯設置事業	勝山町	山本町～ 中町	街路灯 10基					
武家屋敷館整備事業	勝山町		武家屋敷館改造					

(表 2-2 と同じ)

1 回目の整備事業によって町並み保存の意識を高めるため行政主導で推進委員会を作り、2 回目の事業では新たに専門委員会を作った。これら二つの組織はどちらも町の側からの呼びかけで作られた組織であり、推進委員会は、町並み保存地区内の町内の代表者を委員とし、住民に整備事業を周知することを主な目的としていた。また専門委員会は計画を作成するにあたって委員の意見を反映させるというよりも、町当局の作成した事業計画を審議するための組織であり、町から委員に提示される段階で計画はほぼ固まっており、それを「承認」という作業が中心であった。そして、この整備事業により、「観光客が町を歩きだした」という地区住民の観光に対する大きな反応が表れてきた。そのなかで、平成 8 年に住民有志が自分たちの生活を楽しく豊かにすることを目的として「町並み保存事業を応援する会」(以下、応援する会という)を設立。無料休憩所「頼山亭(かざんてい)」を開き、観光核とのふれあいの場として運営をした。このようにして「町並み保存地区整備事業」に関連して行政主導の推進委員会と専門委員会、そして住民有志による「応援する会」の 3 つの組織が作られた。

第 2 項 「町並み保存地区」における観光関連事業

前述したように、民家の修復や資料館の整備などのハード面の事業は岡山県の補助を受けて旧勝山町によって行われたが、こうした町並み整備事業をベースとしたソフト事業は

「応援する会」などの民間が中心となって進められている。その主なものについて以下で簡単に説明する。

- ・のれんの町づくり事業

「応援する会」の最初の事業である。同会が発足した 1996 年度から、会員の事務所や店に掛けたことから広がり、現在約 90 軒にのれんが掛けられている。各戸にのれんがかけられることにより「のれんが招く町」「のれんのそよぐ町」として注目を集めるようになった。

- ・無料休憩所「頼山亭」の開設

「町並み保存地区」にある空き家を「応援する会」が借り受けて、会員の勤労奉仕によって整備し、観光客と地元住民のふれあいの場となる無料休憩所として 1998 年 4 月にオープンした。いつでもお茶がわいているし、自由に休んでいただくというものであり、その世話は「応援する会」メンバーの奥さんが行っている。そのほかにも、町の行事やイベントの折には「応援する会」のメンバーが蕎麦をうち、観光客や地元の人々に提供する場となっている。

- ・「勝山のお雛祭り」の開催

土雛はもともとこの地域にあったものではなかったが、大分県在住の作家が勝山に遊びにきたことが縁でその作品を保存地区内の造り酒屋で展示することになった。この展示会に約 2000 人が集まったことから「応援する会」や旧勝山町、商工会婦人部、町観光協会などによって実行委員会を立ち上げ、翌 1999 年から「町並み保存地区」内で「勝山のお雛祭り」として開催されるようになった。最初の年は保存地区内の旧家に呼びかけて飾ってもらい、5000 人の人が集まった。そうしたことから次の年には町並み保存地区だけでなくそれに隣接する商店街にも広がっていった。「お雛祭り」の実施にあたっては町役場職員がボランティアで協力していたという。

- ・「匠蔵・勝山文化往来館ひしお」の開設

「匠蔵・勝山文化往来館ひしお」（以下、ひしおという）は「町並み保存地区」に残されていた明治中期の醤油蔵を改装した文化交流施設である。旧勝山町が地元で醤油会社を営んでいた住民から、「文化施設」として利用することを条件に寄贈を受け、町民を含めた「町並み委員会」でその活用方法を検討した。この「町並み委員会」の設立については、旧勝山町を含めた真庭郡内の若手経営者による設けられていた「NPO 21 世紀の真庭塾」という勉強会がもともとの母体といえる。この塾に「町並み再生部会」が置かれ、勝山を含めて空き家の活用方法を検討していた。その代表者によって選定された、2~3 名の行政職員を含めたメンバーで「町並み委員会」を立ち上げ、基本構想を作成。旧勝山町は国の補助事業を受け改装を行った。ただし運営は民間に委ねるという当時の町長の意向で「NPO 勝山・

街並み委員会」に運営を委託することとなった。この組織の理事は「応援する会」のメンバー3名が含まれている。日常の運営事務は副館長とボランティアの女性1名で行っているという。

第4節 先行研究のまとめ

この章の第1節では、第3期中心市街地活性化基本計画で駅南地区が高岡市の中心市街地活性化に向けた取り組みの対象になっているという前提を確認した。そして、本研究では、瑞龍寺ライトアップを中心とした駅南地区の観光振興の現状に関して明らかにしていくにあたり、上記で述べた駅南地区に関する特徴を踏まえた上で、第2節で提示した長谷の観光振興を成功に導くための10の条件との照合、第3節で取り上げた岡山県旧勝山町の観光地づくりの事例との比較を通して駅南地区における観光振興の特徴を分析していく。

第3章 調査概要

筆者は2016年5月から2017年12月までの間に計11回のインタビューと、3回のフィールドワークを行った。

インタビューとフィールドワークで行った調査内容に関してはそれぞれ以下の通りである。

<インタビュー>

石崎善朔さん

高岡市の駅南地区にある広告代理店 協和総商の会長である。春のライトアップでは事務局長、夏と冬のライトアップでは副実行委員長を務める。高岡市の南部にある企業約110社の経営者で結成された経済団体の高岡市南部地域活性化推進協議会（以下、南活）の会員でもあり、特別委員長という位置に属している。石崎さんは、ライトアップの運営に長い間関わってきており、筆者が接触した他のインタビューイからも、ライトアップに関しては石崎さんが詳しく知っているという話を多く耳にしたことから、瑞龍寺ライトアップに精通し、他の関係者からも大きな信頼が置かれている人物であると推測したことから、これまでに4回インタビューをした^{注1}。また、ライトアップの他にも、自身が住む町で空き家を再利用したコミュニティ施設の立ち上げにも関わっており、広く地域おこしという分野に関しても、自身の実践を通じた理論に詳しい人物である。石崎さんには、ライトアップのこれまでの経緯や運営方法、資金の集め方など、ライトアップ全体の詳しい運営実態に関してインタビューをした。

高岡市南部地域活性化推進協議会事務局長 林延幸さん

南活の事務局長で、駅南にある会社タカギセイコーの取締役を務めている。南活の事務局はこの会社に置かれており、事務局長は代々タカギセイコーの取締役が就任している。

林さんに対しては、2016年7月14日に石崎さんの会社で石崎さんと合同のインタビューを行った。質問内容はライトアップを開催するときの南活の動きや、南活の活動内容に関してであった。

瑞龍寺住職 四津谷道宏さん

瑞龍寺の住職で、夏と冬のライトアップの会長である。2013年に父である四津谷道昭さんの跡を継いで瑞龍寺の住職に就任した。

四津谷さんには、2017年8月26日に瑞龍寺でインタビューを行った。内容はライトアップを開催するときの瑞龍寺の動きから、瑞龍寺を活かした観光振興についての考えをインタビューした。

末広開発まちづくり事業部 町衆サロン上田さん

高岡市にある第 3 セクターのまちづくり会社「町衆サロン」で高岡市全体のまちづくりに関わっている方で、ライトアップでは「あかり回廊」という、瑞龍寺の回廊の部分をランタンで照らす事業を担当している。

上田さんには 2017 年 9 月 1 日に町衆サロンの本社でインタビューをした。内容は町衆サロンのライトアップへの関わり方や、駅南地区でのまちづくりに関してであった。

高岡青年会議所専務理事花田将司さん、次期専務横田誠二さん

高岡青年会議所はライトアップ当日に現場で動くボランティアとして関わっている。詳しい経緯は後に述べるが、ライトアップは元々青年会議所が始めたものであり、関わりが長い組織としてインタビューをすることにした。

花田さん、横田さんに対しては 2017 年 9 月 5 日に青年会議所の事務所でインタビューを行った。内容はライトアップへの関わり方や、駅南地区での事業に関してであった。

瑞龍寺夢参道まち衆会 伏江努さん

伏江さんは駅南にある旅行会社 富山県福祉旅行センターの社長で、瑞龍寺のすぐ側の町である関本町で生まれ育った。瑞龍寺の参道八丁道に休憩所「まちの駅たかおか」を開き、福祉旅行センターで今も営んでいる^{注 2}。また、高岡駅から瑞龍寺までの道に灯籠を立てるなどの事業を行った瑞龍寺夢参道まち衆会という団体にも立ち上げから属しており、この団体は春のライトアップにもボランティアとして関わっていることから、地域住民であり瑞龍寺周辺のまちづくりにも深く関わっている人物として、伏江さんにインタビューをした。

日時は 2017 年 9 月 15 日で、場所は伏江さんの旅行会社である。質問内容は、まち衆会としてのライトアップへの関わり方、地域住民としてのライトアップへの関わり方、まちの駅たかおかの立ち上げや、夢参道まち衆会の活動内容についてであった。

下関校下活性化行事委員会会長中井明子さん、下関校下連合自治会前会長小嶋忠さん

駅南地区の中でも、瑞龍寺周辺の地域は近くの下関小学校に通う校区であり、下関校区の人々は、地域住民としてライトアップに大きく関わっている。中井さんと小嶋さんは下関校区に住んでおり、小嶋さんは下関校区の町内が連合して結成する下関校下連合自治会の元会長である。中井さんは八丁道で年 2 回行われるフリーマーケット「八丁道おもしろ市^{注 3}」を運営する下関校下活性化行事委員会の会長である。2017 年 9 月 15 日に瑞龍寺にて中井さんにインタビューを実施し、2017 年 11 月 15 日には中井さん、小嶋さんに下関公民館で合同でインタビューを行った。内容は、地域住民としてのライトアップの関わり方や八丁道おもしろ市の運営方法などの話を伺った。

瑞龍寺自衛消防隊隊長 前崎勇一さん

瑞龍寺周辺に住んでいる地域住民の方で、瑞龍寺の警備にあたる瑞龍寺自衛消防隊の隊長を務めている。前崎さんには 2017 年 9 月 17 日に前崎さんの自宅でインタビューをした。内容は、瑞龍寺自衛消防隊のライトアップへの関わり方についてであった。

フィールドワーク

・第 1 回

<日時> 2016 年 5 月 1 日 午後 6 時～7 時頃

<場所> 瑞龍寺

この日は、4 月 29 日から 5 月 1 日までの 3 日間に渡って開催された春のライトアップを観にいった。門前では、高岡の B 級グルメや高岡市と提携を結ぶ飛騨地方の名産品などを売る屋台がいくつか並んでいた。瑞龍寺の中に入ると、プロジェクションマッピングやライトアップが開催されていて、プロジェクションマッピングには大勢の人々が釘付けになっていた様子が印象的だった。筆者は、ライトアップに来場した 13 組ほどの来場客に対して、「どこから来たか」「瑞龍寺までの交通手段」「ライトアップをどの媒体で知ったか」「ライトアップに来た目的」「感想」の 5 つの項目をインタビューした。

・第 2 回

<日時> 2017 年 2 月 2 日 午後 5 時半～6 時頃

<場所> 瑞龍寺大茶堂

この日は、石崎さんをお願いをして、2 月 10 日と 11 日に行われる冬のライトアップの実行委員会会議の見学をさせてもらった。会議には、石崎さんを始めとする協和総商の社員や新聞社・テレビ局の人々、各自治会の代表者、瑞龍寺の住職や職員などを合わせて約 20 人ほどが参加していた。会議は、協和総商の社員がライトアップの流れや当日のそれぞれの動きを説明し、それに対して参加者が意見をしたり質問をしたりするという流れで進められていた。

・第 3 回

<日時> 2017 年 2 月 11 日 午後 6 時半～6 時半頃

<場所> 瑞龍寺

この日は 2 月 10 日と 11 日の 2 日間に渡って開催された冬のライトアップを見学した。春のライトアップと同じように、門前では屋台が並んでいた。春に行われたプロジェクションマッピングは開催されておらず、瑞龍寺のライトアップのみだったが、雪の積もる中で様々な色で照らされた瑞龍寺がとても幻想的だった。一番奥の法堂では、住職がお経を挙

げており、訪れた多くの人々がお参りをしている姿がみてとれた。

第4章 瑞龍寺ライトアップ

第1節 瑞龍寺ライトアップとは

春、夏、冬の年に3回富山県高岡市の瑞龍寺で行われる観光イベントである。平成9年に富山県唯一の国宝として指定された曹洞宗の寺院瑞龍寺を、音楽に合わせて様々な色のライトで照らすもので、普段とはまた違った幻想的な瑞龍寺を楽しむことができる。詳しい経緯については次節で述べるが、現在のライトアップの形になったのは2007年の冬からで、2017年の9月現在までに10年間、計30行われてきている。2015年からは、新幹線開通に合わせて春のライトアップでプロジェクションマッピングも行っており、現在、春のライトアップは「春のライトアップと門前市」というイベント名で、高岡市南部地域活性化推進協議会（以下南活）が中心となっている瑞龍寺ライトアップ実行委員会、夏と冬のライトアップは「冬・夏の祈りと大福市」として瑞龍寺と地元の下関校区連合自治会が中心の国宝瑞龍寺夜の祈り実行委員会が担当していて、春と冬・夏とでは二つの別の組織がライトアップ事業を担当している形をとっている。

第2節 ライトアップ実施の経緯

＜第1期 青年会議所による運営＞

瑞龍寺ライトアップは、大学時代に電気美術研究部に所属していた現住職四津谷道宏さんが、副住職の時代に自身の経験を活かし、1993年頃から業務用のパワーライトを借りて正月や大晦日にお寺を照らすという趣味の一環が元々の始まりである。この頃はまだ瑞龍寺は国宝に指定される前であり、四津谷さんの話によると、国宝に指定される前は瑞龍寺は寺の拝観に今ほど力を入れているわけではなかったという。多くの人が観光に来るような寺ではなく、お金もそれほどなかったと四津谷さんは語る。さらに、富山県は昔から浄土真宗を信仰する人が多く、曹洞宗である瑞龍寺はその点においても富山県内では稀有な存在であった。そのような逆境を乗り越えて1997年に瑞龍寺が国宝に指定されると、文化財としての瑞龍寺を長い間に渡って保存・保護する義務を背負うことになった。文化財を保存・保護していくにあたっては、寺の修理などのために当然お金が必要になってくるが、そこで前の住職である四津谷道昭さんはその資金を集めるため、瑞龍寺をユースホテルとして利用できるようにしたり、寺の拝観説明に力を入れ始めたりすることで多くの人が立ち寄れるような空間づくりにとりかかった。さらに、経済界との繋がりも重要視した。前の住職は高岡市のロータリークラブに入っていたことから、そのなかで高岡市との経営者と親しい関係を築いていくことで瑞龍寺の金銭面での後ろ盾を立てていったのである。前住職、現住職ともに、瑞龍寺を様々な角度からアピールし世の中にその価値や魅力を伝えるとともに、国宝としての瑞龍寺を守っていけるよう金銭面での支えのためにも多くの尽力をしたことが四津谷さんへのインタビューから伺えた。

2000年の夏からは、高岡青年会議所が青年会議所設立30周年を祝うため、「TAKAOKAイルミナイトイリュージョン」としてその頃は副住職であった四津谷さんの趣味を引き継ぐような形で瑞龍寺のライトアップを始めた。当初は7月15日から2日までの七日間の開催で、青年会議所専務理事花田さんと、下関校下活性化行事委員会会長であり、この頃のライトアップに関わっていたボランティア団体の一員である中井さんによると、入場料金はとらずに富山県からの助成金と、青年会議所の会費で運営をしていたそうである。当時の運営の主体は青年会議所で、当日のボランティアには高岡市にあるボランティア団体が協力した。翌2001年も、青年会議所主催で8月に9日間ライトアップを開催した。2002年は北日本新聞が共催に加わり、「北日本新聞・ふるさとみらい21高岡」として、4月と8月の2度ライトアップを開催した。翌年の2003年は8月に5日間開催したが、これまでとは違って、寺の入り口に箱を置き、入場協力金として100円を設け、寄付金を集めた。ライトアップ実行委員会が作成した資料によると、2004年には組織を拡大し、実行委員長に自治会の会長を据えたという記述がなされている^{注4}。また、青年会議所がライトアップを始めた2000年には、伏江さんの会社によって全国初の民間主導による「まちの駅」が八丁道にたてられた。

<第2期 瑞龍寺夢参道まち衆会への運営の移行>

2005年、それまでライトアップの運営主体だった青年会議所は、ライトアップをさらに大きなイベントにしたいという思いの反面、富山県からの助成金も3年という期限があったため打ち切れ、自分たちだけの会費だけでやっていくのは厳しいということから、瑞龍寺周辺の活性化を図るため有志によって結成された瑞龍寺夢参道まち衆会（以下、まち衆会と呼ぶ）に運営が移行された。その最初の年である2005年はこれまでと同じように8月に3日間ライトアップを開催した。翌2006年も、まち衆会主催によって8月に3日間ライトアップが開催された。この年のライトアップからは、北日本放送も共催として参加するようになったことが資料から分かる。また、現在のライトアップでも重要な資金源である企業協賛の依頼もこの年から行ったことも資料から見てとれる。

<第3期 高岡南部地域活性化推進協議会の参入>

まち衆会は小さい組織だったため、ライトアップを運営していくことは厳しかった。当時のまち衆会には、現在の春のライトアップの運営母体である高岡南部地域活性化推進協議会の当時の会長であった羽場さんという方がまち衆会の顧問に赴任していたが、その羽場さんが瑞龍寺を核に高岡に来る人を増やす目的で、「国宝瑞龍寺年間100万人キャンペーン」事業を提案し、ライトアップをそのメイン事業として位置づけた。2007年の冬からは、今まで夏のみだったライトアップをさらに冬にも行おうと、自身が会長を務める高岡市南部地域活性化推進協議会（以下、南活と呼ぶ）がライトアップを運営する中心組織となった。南活とは、高岡市南部の経済を活性化するため、南部にある110社あまりの企業の経営者で結成された団体である。そして、南活を中心として当日のボランティアとして活動する地元の下関連合自治会、PRを担当する北日本新聞と北日本放送、そして地元のまちづくり会社である高岡町衆サロン、まち衆会で一つのライトアップ実行委員会を立ち上げ、組織の拡大を図った。その他、自治会の中の組織である瑞龍寺自衛消防隊、下関校下活性化行事委員会、下関校下交通安全協会などにも声をかけた。

南活という大きな組織が加わったことや、北日本新聞も共催に加わり資金の幅も増えたことも相まって、山門だけでなく境内や回廊も光で照らしたり、門前市やステージアトラクションなどの関連イベントも行うなど、イベントを盛り上げるために様々な取り組みを行った。そのような取り組みを行い、2007年の冬はそれまでで最も多い1万6500人がライトアップに came。その後すぐに羽場さんは亡くなられてしまい、その意思を受け継いだのが青年会議所のころからライトアップに携わる石崎善朔さんだった。石崎さんは、元々青年会議所に所属しており、そこで社会開発運動として高岡市の地域開発運動に携わっていたことや、自身が会長を務める会社が広告代理の仕事であることから、地域開発のイベントづくりに興味があり、精通していた人だった。そして、羽場さんの命日が石崎さんの誕生日だったことから、羽場さんが自分に託してくれたのだと石崎さんが理解し、ライトアップを続けること決意したと話す。2008年度より、南活の企画部会はライトアップ

を主な事業とする特別委員会に変更され、特別委員長として石崎さんが南活に加わった。その後も冬と夏の年 2 回、ライトアップが行われ、高岡駅やイオンモール高岡から瑞龍寺を繋ぐシャトルバスの運行を開始したり、地元の作曲家によるオリジナル曲を制作したりするなどの様々な取り組みを行い、毎回何万人もの来場者数を記録する大きなイベントになった。

<第 4 期 組織の分割>

大規模なライトアップを行うためには、企業からの莫大な協賛が必要だが、徐々に企業側からは、毎年夏と冬の 2 回も協賛金を出すのは厳しいという声が上がってきたため、2009 年頃から何度か会議を重ねた結果、年に 1 度、GW のときにのみ行うことが決まった。だが、共催である北日本新聞としては、今まで通り冬と夏もライトアップをしたいとのことや、瑞龍寺も継続していきたいということから、連合自治会長であった小嶋さんに話を持ち掛け、これまでの冬と夏のライトアップに代わるものとして瑞龍寺と地元の連合自治会主体の「国宝瑞龍寺 夜の祈り実行委員会」を立ち上げた。そしてライトアップに詳しい石崎さんがその副実行委員長に就任した。2011 年より、南活主体の「ライトアップ実行委員会」が行う「春のライトアップと門前市」と、瑞龍寺・下関連合自治会主体の「国宝瑞龍寺夜の祈り実行委員会」が行う冬と夏の「夜の祈りと大福市」が瑞龍寺ライトアップとして年に 3 回行われている。春のライトアップには、南活をはじめ高岡市観光協会や高岡市の観光交流課や夢参道まち衆会など、協力する団体が多く、期間は 3 日間、資金は 1300 万円となっている。その一方で、冬夏は南活が全面的に協力するわけではなく、高岡市の各種団体やまち衆会も協力団体から抜けるため協力する団体が少ないため、資金は 600 万円程度で春の半分以下になっている。開催される期間も 2 日間と、春の 3 日間に比べ短い。そのため、春はプロジェクションマッピングをしているが冬夏は資金が足りないという理由で行っていない。その代わりに、冬夏は、住職が法堂でお経をあげ続けるなどして、差をつけている。

2014 年には、南活が高岡市に要望書を提出し、新高岡駅から瑞龍寺までの間の道をカラー舗装し、「瑞龍寺道」という名の道の整備の実現に貢献した。

第3節 ライトアップに関わる組織

この節では、ライトアップに携わっている組織について説明する。まず、はじめに前提として、春と夏・冬のライトアップのそれぞれの実行委員会の構成について説明し、次にどのような団体がどのように事業に関わっているかを説明する。

第1項 実行委員会の構成

春と夏・冬のライトアップでは、実行委員会の構成に違いがある。それぞれで実行委員会の構成にどのような違いがあるのか、以下で詳しく確認していく。

春のライトアップは、高岡市の南部にある企業が団結した団体である高岡南部地域活性化推進協議会が中心となり、北日本新聞と北日本放送、高岡市のまちづくりを行っている第三セクターのまちづくり会社である末広開発、瑞龍寺周辺のまちづくりの携わる瑞龍寺夢参道まち衆会、そして地域住民のまとまりである下関校下連合自治会が実行委員会を形成している。現在の実行委員長には高岡南部地域活性化推進協議会の会長である笠井千秋さんが就任している。事務局は、ライトアップ全体を取り仕切る石崎さんの会社に置かれており、石崎さんが事務局長となっている。

夏・冬のライトアップは、瑞龍寺と下関校下連合自治会が中心となって、北日本新聞、富山テレビ、チューリップテレビが実行委員会を形成している。春のライトアップの中心団体であった高岡南部地域活性化推進協議会は実行委員会から抜けていることが大きな違いである。また、マスコミ関連の組織については、春のライトアップに実行委員会として関わっていた北日本放送も、夏・冬のライトアップでは実行委員会から抜けて、チューリップテレビと富山テレビが新たに実行委員会に加わっている。その他、瑞龍寺夢参道まち衆会、末広開発も夏と冬のライトアップでは実行委員会から抜けており、春のライトアップに比べて、夏と冬のライトアップは関わっている団体が少ないことが特徴である。

第2項 各団体の動き

第1項では、春と夏・冬のライトアップの実行委員会がどのような組織や団体で構成されているのかについて確認した。次に、ライトアップに関わる主な団体の活動内容と、ライトアップへの関わり方について、これまでのインタビューを通して明らかになったことを述べる。

高岡南部地域活性化推進協議会

高岡南部地域活性化推進協議会は春のライトアップの実行委員会の中心組織である。南活とは、1991年8月、高岡駅の南側に北陸新幹線の駅が設置されることを受けて、これから南部が発展していくことを見据えて、企業で団結し新しい魅力あるまちづくりについて考え推進することを目的に設立された組織で、高岡市南部にある民間企業約110社の経営者が参加している。各種の研究会やフォーラムの開催、先進地域の視察と交流等を進める

一方で、市に毎年要望書を提出したり具体的なイベントの運営・参加も事業活動にも取り込んでいる。要望書を提出して実現した事業としては、新高岡駅から瑞龍寺までの「瑞龍寺道」の整備がある。現在は「春の瑞龍寺ライトアップ」をメインの事業として取り組んでおり、南活の中の特別委員会が担当している。

春のときには毎回組織としてライトアップに 50 万円の資金を提供しており、会員企業からも約 100 万円分が協賛金として提供される。この南活からの資金提供をベースにして南部だけでなく高岡市全体の企業から企業協賛をしてもらっていると石崎さんは語った。このことより、南活はライトアップを運営していく上で重要な資金集めのネットワークと言え、お金の面でライトアップを大きく支えている。加えて、当日はボランティアとしてメンバーから何人かが手伝ったりもしている。

一方で、夏と冬はライトアップの実行委員会からは抜け、いくつかの会員企業が資金提供をするにとどまっている。南活が抜けるために、夏と冬は資金は春の約半分程度になっている。

下関校下連合自治会

下関校区の町内が連合した自治会である。瑞龍寺周辺の自治会だけでなく、さらに広い範囲の町も参加している。また、「下関校下活性化行事委員会」が中心となって、毎年 5 月と 10 月に瑞龍寺参道 八丁道にてフリーマーケットイベント「八丁道おもしろ市」にも連携している。

夏と冬のライトアップは連合自治会と瑞龍寺が実行委員会を形成しているが、春のライトアップと冬夏のライトアップとでは、どちらも境内整備のボランティアとして動いている。

夏と冬のライトアップにはその時の連合自治会長がライトアップの実行委員長に就任することになっている。

各自治会

ライトアップに参加する自治会とは寺町、関本町、八丁道、芳野町、神主町の 5 つの瑞龍寺周辺の町の自治会のことを指す。ライトアップには、1 日に各町 2 名ずつ境内整備のボランティアとして参加している。高齢化がすすんでいる。年に 3 回もボランティアをするのはきついと、協力団体から抜けた地域もある

自治会がライトアップに参加するようになった当初の頃は自治会も会議で意見を出していたが、今はそれほど出しておらず、協和総商が事業の大体を進めていると中井さんは語る。

瑞龍寺

ライトアップが開催される寺である。1997 年に仏殿、法堂、山門の 3 つの建物が近代禅

宗様建築の代表作であるとして国宝に指定された。事務長である遊田さんは、瑞龍寺で何かイベントを開催するときに主催者と話し合っ、「文化財としての瑞龍寺」という面から、瑞龍寺をどのように使用するかを決定している。

協和総商

石崎さんが代表取締役会長を務める駅南地区にある広告代理店である。協和総商のホームページによると、2007年からライトアップの企画運営に携わっている。事務局は三回とも協和総商に置かれ、毎回の事業内容は新聞社、テレビ局とともに協和総商が大方を計画し、決まったものを下関の住民や瑞龍寺など、当日の協力団体に話すという流れでライトアップが行われている。

以上の5つの組織がライトアップを運営していく主なものだが、その他にもライトアップの運営にはいくつかの組織が関わっている。以下では、ライトアップの運営に関わるその他の団体の概要と、ライトアップで担当している仕事について確認する

高岡青年会議所

20歳から40歳までのメンバーで形成される組織で、全国にある青年会議所の高岡支部である。40歳になると現役を退かなければならないのが特徴で、毎年役職や委員会は全部交代している。例会や委員会事業であるセミナー、社会奉仕を通じて、経営力や指導力、社会開発などといったトレーニングを行いながら、異業種交流や全国のメンバーとのネットワークを活かし、自己啓発と自己修練を行っている。一方で地域のまちづくり事業にも積極的にとりくんでいる。ライトアップ以外では、大伴家持1300年を記念したイベントを開催したり、高校生向けの選挙教育事業など、市民一人ひとりの意識を変えることを目的とした事業を展開している。

ライトアップをイベントとして成立させたのは青年会議所であり、最初は青年会議所の会費と助成金で運営をしていた。助成金の期限に達し、青年会議所だけで継続していくことが資金面で厳しくなってくると、夢参道まち衆会に実施主体を移行したが、その後もライトアップには当日のボランティアとして関わり続けている。青年会議所がライトアップで担当するのは、当日の境内整備と、あかり回廊と呼ばれる、ライトアップ中の瑞龍寺の回廊にランタンを灯す事業の手伝いである。

高岡町衆サロン

末広開発株式会社のまちづくり事業部。末広開発とは、高岡駅前にある複合施設「ウイングウイング高岡」の完成とともに、平成16年に設立された会社で、主にウイングウイング高岡の管理運営を行い収益の役割を担う部門と、中心市街地のまちづくりを行い公益的な役割を担うまちづくり事業部（通称町衆サロン）がある。町衆サロンの財源は、ウイン

グウイング高岡などの施設のテナント料もあるが90%は市や県、商工会議所からの補助金で賄っていると言う。町衆サロンの具体的な業務内容は、中心市街地のにぎわい創出のための様々なイベントの企画運営や、まちなかの交流スペースの創設や運営、また市からの委託事業。町衆サロンの上田さんの話によると、ほとんどは駅北側の市街地での事業であり、駅南でのイベント関連の事業は瑞龍寺ライトアップぐらいだと言う。それ以外では、町衆サロンの前身となる商工会議所が駅南側の活性化のために有志によって組織された瑞龍寺夢参道町衆会の立ち上げを支援した。また、駅北側のまちづくり協議会と町衆会が交流する場を設けたりなど、相談やアドバイスに乗っているという。ライトアップでは、青年会議所とボランティアグループとともに、あかり回廊の事業を手伝っている。

高岡ボランティアグループ

高岡で80歳近い人たちで形成されている4,5人のボランティア団体。青年会議所、町衆サロンとともに、あかり回廊の事業を担当している。瑞龍寺ライトアップ以外にも、古城公園などでランタンを使った事業を行っている。

瑞龍寺夢参道まち衆会

2000年に商工会議所主導で中心市街地の活性化が行われたときに5つの地区で駅南地区を活性化させようと結成された組織で、現在のメンバーは20名弱である。瑞龍寺に来る人を迎えるための事業を展開したり、地域住民の意見をまとめて行政に交渉などをするプラットフォームのような役割をしている。駅南地区に住んでいるメンバーは約3分の1。当初は青年会議所から引き継いだライトアップ事業の他にも瑞龍寺付近でイベントを行っていたが今はしていない。また、最も大きな事業として、高岡駅の南口に降りたあとの景観を大事にするために、南口から瑞龍寺までの道に灯籠を建てた。現在は、瑞龍寺から新高岡駅までの道までも灯籠を建てるために寄付金を募り、2017年10月末には約半分の20基が建設される予定。その他に、以前観光バスが瑞龍寺の中に直接停車していたことに対して、危険だと考え、瑞龍寺の観光駐車場にバスが停車するように地元とともに運動をした。ライトアップには、春のみ協力しており、冬と夏には参加していない。

瑞龍寺自衛消防隊

瑞龍寺周辺の町である寺町と関本町の2町内からなる、瑞龍寺の保存保護のために結成された瑞龍寺専属の消防隊である。メンバーは現在約29名いる。ライトアップでは、境内の整備として食べ歩きをしている人や立ち入り禁止区画に入っている人に対して注意をしたり、その他にも怪我や火事などのトラブルが起こった時にはすぐに出動できるように待機している。ライトアップ以外では、毎年防災設備を使っでの訓練を行ったり、大みそかから元旦にかけては瑞龍寺で境内の警備にあたっている。

下関校下交通安全協会

下関校区でライトアップやおもしろ市などのイベントがあるときに駐車場の整備をしたり、バスや車の誘導をする団体である。

下関校下食生活改善推進協議会

高岡市で1年講習を受け、住民の健康のために動いている。ライトアップでは、当日に先着順でだんごを配るなどを行っている。過去には薬膳粥をふるまったりもしていた。

高岡法科大学生

高岡市にある大学の学生で、ライトアップではアルバイトとして雇い、瑞龍寺周辺の交通整理の手伝いをしている。

アートエレクトロン

高岡にある照明会社で、ライトアップの照明の制作を担当している。

キャンバス

春のライトアップで行われるプロジェクションマッピングの制作を担当している富山の会社である。

テレビ局・新聞社

テレビ局や新聞社などのマスコミは、協和総商とともにライトアップの事業内容を計画したり、広告宣伝をして収入を得ている他、当日のチケット販売や入場受付、境内整備などボランティアとしても当日動いている。また、資金も提供しており、金銭面でも大きく支えている。春のライトアップは北日本新聞社と北日本放送が関わり、夏と冬は北日本新聞社と富山テレビ、チューリップテレビが関わっている。北日本新聞社はライトアップの開催中に瑞龍寺門前の広場で行われる「門前市（夏と冬は「大福市」と呼ばれる）」も担当している。

第5章 分析

この章では、駅南地区の観光振興についてより詳しく分析していくために、大きく3つの節に分けて分析をする。まず最初に、主にライトアップを中心として駅南地区で観光振興を進める組織について様々な視点から分析をし、次に瑞龍寺を観光資源という点で捉えた上で、どのように観光振興に活かされているのかについて考える。そして最後に改めて駅南地区の特徴を駅北地区との比較を通して踏まえた上で、瑞龍寺周辺を中心とした駅南地区の観光振興がどのように進められているのかを詳しく掘り下げていく。

第1節 組織

第1項 機能的な役割分担

ライトアップでは、各々が役割を与えられており、多くの組織が関わっている。

たとえば、資金の提供は高岡の企業で、特に春のライトアップでは南活をベースにして資金を集めている。事業内容の企画から実行までは、石崎さんを含む協和総商やマスコミ、瑞龍寺の事務方である遊田さんらの事務局が担当している。事務局会議では、協和総商やマスコミが作成した事業案を、遊田さんのような瑞龍寺の事務方が瑞龍寺でできるかどうかを判断する。そして、事務局会議で決まった事業案を最終的に判断し決定するのは、実行委員会であり、通常はライトアップが始まる数週間前に会議にかけられる。筆者がフィールドワークを行った冬のライトアップの会議では、事務局のメンバーに加えて地域住民や住職も参加し、事業案を協和総商が説明して、それに対して意見を求めるという形で進められていた。

このほかにも、演出面を担当するのは外部の専門業者、PRを行うのはマスコミ、境内整備は地域住民を中心としたボランティアなど、それぞれが役割を与えられている。各々が明確な役割分担をしていることで事業を効率よく成功させることができるのではないかと

第2項 組織の変遷

これまでの経緯を辿ると、元々住職が趣味で始めたライトアップだが、青年会議所に実施主体が移され、毎年恒例の小規模なイベントとして成立したのちに、さらに大きなイベントにするために資金の拡大を図ろうと多くの団体を巻き込んでいっていることが分かる。第三期に南活が加わった頃になると、入場料金をとるようになりライトアップが商業ベースになってきたと言える。また、反対に年に3回資金提供をすることは厳しいという協賛企業からの意見で年に2回から1回へと、資金の縮小が検討され、それによって春と夏・冬でライトアップの実施主体が変わるなど組織の分割も起こった。このことから、資金をどのように集めるかや、資金提供の大きさによって組織が変遷していることが分かる。

また、ライトアップでは初めに事業の目的を決めて、その目的に向かって必要な組織とネットワークを形成している。たとえば、ライトアップというイベントを周知するために、新聞社やテレビ局などを組織に巻き込み、広告面はこれらのマスコミに担当してもらっている。また、資金の拡大を図るために、資金のネットワークとして重要な南活を組織の中にとりいれている。さらに、資金が拡大し大きなイベントとなったことで当然現場で動く人の数も増やさなければならないが、下関校下連合自治会を組織に巻き込むことで現場で動くことのできる人数を増やしている。このようにして、ライトアップでは目的に向かって合理的にネットワークが形成されていることが伺える。

これらの経緯を経て、現在のライトアップは春は南活・北日本新聞・北日本放送・夢参道町衆会・高岡町衆サロン・下関連合自治会が団結、夏・冬は瑞龍寺・下関連合自治会・富山テレビ・チューリップテレビ・北日本新聞が団結しそれぞれ実行委員会を形成しているということになっている。しかし、調査を進めていく中で、3回のライトアップはどれも協力団体の当日の役割にあまり違いがみられないことが分かった。ライトアップをどのように行うかを決めるのは新聞社やテレビ局、協和総商で、当日の境内整備は地域住民をはじめとした各団体、あかり回廊を担当するのは町衆サロンや青年会議所、ボランティアグループ、その他ボランティアで賄えないところは外部の業者に依頼するなど、3回とも関わる団体はすべての回で同じ動きをしていると考えられる。つまり、春と夏・冬は名義上は別の組織が運営していることになっているが、それらの違いは資金提供の大きさと、資金提供の大きさ故にできる内容の規模の違いだけだと考えられる。南活が主催する春のライトアップは資金が1300万で、プロジェクションマッピングを行っているのに対し、夏と冬は資金が600万円と、春に約半分程度しかない。その違いを埋めるために、夏と冬は住職が期間中に法堂でお経をあげていうという。

第3項 地域住民の理解

ライトアップ当日、瑞龍寺の境内で来場者の誘導や警備を行う仕事を担当しているのは、主に下関の地域住民であるが、高齢化の進む下関校区の人々にとって、それらの仕事をこなすのは大変なことだと地域住民の中井さんと小嶋さんは語った。特に冬は気温の低い中、長時間外で立って来場者の誘導をすることは体に負担がかかる。さらに、下関には、ライトアップ以外にも瑞龍寺門前の「八丁道」と呼ばれる参道で、5月と10月の年に2回行っている「八丁道おもしろ市」がある。八丁道おもしろ市では、フリーマーケットや地元の小中学生や保育園児による発表会などを行っている。そのため、下関の人々にとっては、1年のうちに5回地域のイベントがあり、特に春の時期はライトアップが終わるとすぐにおもしろ市の運営にとりかかかなければならないこと、また4月は役員改正が終わっていないためボランティアを出すことが難しいなどの理由からより負担になる。これら下関の状況や住民の思いはライトアップを取り仕切る石崎さんも理解しており、実際に筆者が2016年冬のライトアップ会議に参加したときも、ある地域の代表者から、「年々警備がきつくなっていると（自分たちの）自治会から意見が出ている。」との声が石崎さんに対して寄せられていた。

また、ライトアップ会議では下関の人々ができるだけ負担を軽くするためにローテーションを組んでもいいかと石崎さんに提案しており、石崎さんもそのような意見に対して柔軟に対応していた。

このように下関の住民にとってライトアップを運営していくことは多大な労力を使うことが分かるが、それでも瑞龍寺ライトアップに参加するのは何故なのか。以下は下関校下連合自治会の前会長小嶋さんと、下関校下活性化行事委員会の中井さんの語りである。

やっぱりお寺さんも地元のほうにやってこられましたよね。地元の人達といろんなお話されたら地元の人も瑞龍寺あつての校下やなと認識されて。なにかお寺にあつたら大変やけど協力しましょうというように。

中井さんによると、瑞龍寺は下関のものであり、瑞龍寺があつてこそ下関が成り立っているという意識が下関の人々にはあるそうである。しかしこのような意識は最初からあつたわけではない。瑞龍寺から300mほど離れたところ観光バス専用の駐車場があるが、以前は観光客にできるだけ歩く負担をかけないようにという瑞龍寺前住職の気配りから、観光駐車場にバスは停まらず、瑞龍寺に直接バスが入るようにしていた。そうすると地盤の緩い八丁道を大型のバスが通ることになり、八丁道は通学路でもあるため危険であると周辺の人々は感じていたと小嶋さんと中井さん、町衆会でもあり下関の住民でもある伏江さんは語った。特におもしろ市のときは多くの人々が八丁道周辺に集まることになり、狭い道をバスが通るのは危ないという意見も見受けられたそうである。そこで、下関の人々は町衆会と協力しなにか観光駐車場を利用してほしいと運動し、瑞龍寺の新しい住職であ

る四津谷道宏さんも、八丁道を歩いて瑞龍寺に来てほしいという思いがあり、そのような意見が合致して今では瑞龍寺に向かうバスは観光駐車場に停車するようになった。このようなやりとりがあり、下関の人々も瑞龍寺との関わりがより密になり、瑞龍寺に何かあったら守らなければならないという意識が徐々に根付いてきたそうだ。また、それだけでなく、おもしろ市の総会には住職が必ず顔を出してくれたり、おもしろ市を開催するにあたり瑞龍寺の駐車場やトイレなどを貸してくれたりなど、瑞龍寺と一緒におもしろ市を運営していくようになったことも、下関の人々の瑞龍寺に対する誇りや保護意識を助長するひとつのきっかけになった。四津谷さんへのインタビューによると、四津谷さん自身も地域との関係性を殊更重要視しており、中井さんや小嶋さんが話したように、おもしろ市で駐車場を貸出したり、また補助金を提供したりなど地域と寺がお互いに発展する関係性を築き上げていくことを心がけてきたと語った。

以上のような流れで、下関の人々と瑞龍寺の間には徐々に信頼関係が形成されてきた。そのため、今では困ったときや協力が必要なお互いに助けあうような関係になっており、地域住民はライトアップに対して一定の理解を示し協力をしていることが伺える。

第2節 観光資源としての寺

第1項 「遊び場」から「観光地」へ

これまでの経緯を辿ると、国宝に指定される前の瑞龍寺は八丁道こそ整備されていたものの、今ほど拝観に力を入れていたわけではなく、周辺にも観光客が休憩できるようなお店もほとんどない状態であったことから、国宝に指定される前から観光地として注目されていた場所であったとは言い切れない。また、地域住民である中井さんによれば、国宝になる前までは地元の人々にとって瑞龍寺は「遊び場」だったそうで、お金を払わなくても瑞龍寺に入って遊ぶことができたそうだ。また、町衆会のメンバーであり子供の頃から瑞龍寺の側で育ってきた伏江さんも、昔は瑞龍寺でよく遊んでいたと語っていた。1997年に瑞龍寺が国宝に指定されてからは、今まで瑞龍寺が「遊び場」であった地元の人々は、拝観料を払ってまで瑞龍寺に行こうとは思わなくなったそうである。そのことが、第三節で中井さんが「こっちに来られましたよね。」と語るように、住民と瑞龍寺との間に以前考え方に距離ができていたことが伺える要因のひとつになったのではないかとと言える。

京都には全国的に有名な寺がいくつもあるが、そのような寺の多くは昔から観光地として整備されていたり、本堂が国宝に指定されている善光寺を例にあげても、門前町が昔からあったことを考えると、「遊び場」だった瑞龍寺が国宝に指定されたことで突如として「観光地」になったという例は、他の地域で観光地として注目されている寺ではあまり見られない事例であり、その点でやはり瑞龍寺は特殊性を持った場所であると言える。

第2項 文化財としての瑞龍寺

瑞龍寺がライトアップを行うのは何故かと住職の四津谷さんに聞いたところ、瑞龍寺は「保存と公開」が重要だと話した。瑞龍寺が国宝になって、より一層保護しなければならないという考えの下で瑞龍寺は国と県、市、所有者の支援を受けており、それらの支援で修理などを行なっている。それらの助成金は税金で、「国のものであり皆のもの」という考えで、瑞龍寺の宗教的価値や文化、歴史的背景を国民に理解してもらうためにライトアップをしているそうだ。これはライトアップだけでなく、他の瑞龍寺で行われるイベントでも同じことが言え、ライトアップは瑞龍寺と高岡を理解してもらうための一つの手段だと話す。

しかし、最初は瑞龍寺も様々なトラブルがあった。瑞龍寺は曹洞宗の寺であるが、北陸は浄土真宗を信仰している人が多いため、曹洞宗である瑞龍寺は、高岡市にある多くの文化財の中でも特異な立場にあったと言う。また、曹洞宗の中でも瑞龍寺は微妙な立ち位置にあった。

瑞龍寺というお寺を運営するのはかまわんが、曹洞宗というお寺なんだから、ライトアップって何やってんの、だったり。いろんな意味でのクレームみたいな話があるわけですね。最近はもう言われなくなった。でも最初のころはそういうものがありました。世

の中には正論は山ほどありまして、立場立場で違ってくる。そうした中でこのお寺をきちんと保存していく。そうしたものを世の中に公開していく。曹洞宗のお坊さんに見れば、しょせん観光寺だろ、と。修行もやってないじゃないかと。うちの方丈も売り言葉に買い言葉で「そうだよ」と開き直ったんです。そのへんのなかで曹洞宗のなかで瑞龍寺は微妙な立場にありました

現在はあまり言われなくなったそうだが、周りの塔頭寺院からもライトアップなどのイベントに対してマイナスな意見をつけられることが多かったと話した。そうした中で、そのような人の話もよく聞きながらも、経済界とのつながりや人脈を作って金銭面での後ろ盾を形成していったと話した。ここでも、瑞龍寺が観光地化に向けて、合理的にネットワークを形成した経緯をうかがうことができる。

第3節 駅南地区の特徴

高岡市の中心市街地活性化基本計画では、駅南地区が計画の指定区域になっているが、町衆サロンが主に行っているまちづくり事業は駅北地区が中心となっている。その理由について、町衆サロンの上田さんは以下のように語った。

駅南地区については、開発自体も昔はそんなに進んでいなかったんです。ただイオンができて、今新幹線の駅ができてこういうなかで、どちらかというたら、ほっといてもそういう、民間の開発ちゃ進んでいく。

(中略)

だけでも我々としては、もちろんそこも大事。そこも大事だけどやっぱり優先順位としてさっきいったように駅の北側の商店街とか古いまちなみ。ああいったところは歴史文化を守り続けたりしてきて、そういう地域のコミュニティを形成しとったということだからそこをやれば我々としては、少し若干、優先順位として高いという意識のなかで事業を進めてきとるんです。

駅南地区は新幹線の駅やイオンモール高岡が進出したことや、土地区画整理事業によって道路が整備されたこと、地価が安い等の理由によって、駅北と比較して民間の開発がされやすい。しかし、駅北は駅南に比べて御車山祭りや七夕祭りなどの文化が豊富にあり、それを支えているのは商店街で、そのような古くからの根強い地域コミュニティを支援するため町衆サロンの活動は駅北に重点が置かれているという。

また、駅北地区との大きな違いとして駅南地区には商店街の組織がないことが挙げられる。そのため、結束力の強いまとまりが駅北地区と比べて元々なかったことが分かる。ただ、旧中心市街地活性化法が定められたときに制定されたTMO構想とよばれる中心市街地の商業を活性化させる構想には、駅南地区も入っていたため、駅南地区にも商店街のような組織を作ろうと立ち上げたのが瑞龍寺夢参道まち衆会である。

以上のことから、駅南地区は駅北地区に比べて行政やまちづくり会社による観光事業に力が入れられていないことと、商店街のような、昔からの結束力の強い組織がないということが特徴として挙げられる。

第4節 観光地化へ向けた各団体の取り組み

ここまでの分析では、瑞龍寺は国宝に指定される前までは観光スポットとして注目されていた場所ではなく、地域住民にとってはむしろ遊び場であったことが明らかになった。突如として瑞龍寺が国宝に指定されたことで、観光地づくりを進めていこうという機運が発生したが、門前町のない瑞龍寺の周りには観光客が休めるようなお店はほとんどなく、さらに高岡市やまちづくり会社も駅南地区に対して大きな計画の下で観光地化に向けた整備事業やまちづくり活動を行っているわけではなかったという経緯をふまえると、その観光地づくりは苦難の道を迎ったと考えられる。

この節では、これまで明らかにしたことを踏まえて、瑞龍寺周辺の観光地化を進めていくにあたって、どのような組織が瑞龍寺周辺の観光地づくりに関与したのかについて分析していく。

第1項 高岡南部地域活性化推進協議会の取り組み

南活が瑞龍寺周辺にて行った主な事業としては二つある。一つは、ライトアップの規模を大きくしたことである。もう一つは瑞龍寺道の整備に関する要望書の提出である。これまでの経緯や活動内容で明らかにされたようにライトアップにおける南活の最も大きな性質は資金ネットワークであるということである。南活のような規模の大きな団体が全面的にバックアップしたことでライトアップが駅南地区の観光イベントの目玉になったことから南活はライトアップを通じた駅南地区の観光振興に大きく貢献したと考えられる。

また、瑞龍寺道の整備の要望書を市に提出し、それが実現したことで、新幹線で高岡市にやってきた人が瑞龍寺に来やすいような道しるべが作られた。このことから、南活はライトアップだけでなく、新高岡駅から瑞龍寺まで徒歩で歩いてくる観光客の導線作りにも貢献したと言えるのではないかと。しかし一方で、瑞龍寺道に街灯が少ないため夜は暗く、大きな看板もないため入口も分かりづらく、住民は何度も観光客に「瑞龍寺道はどこか」という質問を受けるといことから、新高岡駅から瑞龍寺までの観光客のスムーズな移動のためには、瑞龍寺道の改善が必要であることが伺える。

第2項 瑞龍寺夢参道まち衆会の取り組み

まち衆会は、瑞龍寺に向かう観光バスが、観光駐車場を利用せずに直接瑞龍寺に入場していたことに対する住民の意見を聞いて運動をした。そのことで今では住民の不安が解消され、瑞龍寺と住民の間にさらなる信頼が生まれた。このように、まち衆会は住民の意見を聞き、ノウハウやお金のない住民の代わりに、要望の実現に向けて動くプラットフォームのような役割をしていることが分かる。

今現在のまち衆会は駅南に住んでいるメンバーはほとんどいないそうだが、以上のようなやりとりから、瑞龍寺周辺の観光地化の過程においては地域住民に最も近かった経済団体だったことが分かる。これは、高岡市の南部全体で活動する南活と違ってまち衆会は瑞

龍寺周辺が活動の拠点になっていることや、人数が少なく地域住民である伏江さんのような人物が加入していることでより地域住民の生の声が届きやすかったためではないかと考えられる。一方で、人数が少ないということから、南活と比較して使える予算も少なくなるということが推測される。ライトアップにおいてお金や組織の規模の問題でまち衆会から何活に実行主体が移されたように、瑞龍寺周辺においては、まち衆会に足りない部分を南活が補っている形になっていると考えられる。

第3項 下関校下活性行事委員会の取り組み

下関校区内のそれぞれの町内から数名ずつ選ばれたメンバーで構成される下関校下活性化行事委員会は毎年5月と10月に八丁道で行われる「八丁道おもしろ市」の企画運営をメインの活動としている。おもしろ市とは、八丁道で骨董品や県内外の特産品、手作りの小物やパン、クッキー、野菜等を販売する「市」である。地元の保育園児や小学生、中学生、その他の団体による楽器の演奏や合唱、演舞などの催し物も併設イベントとして開催されている。おもしろ市の実施主体は「八丁道おもしろ市実行委員会」という組織だが、中心は活性化行事委員会の役員である。活性化行事委員会の委員は流動的であるが、おもしろ市実行委員会の中心にいる役員の大部分は昔からの固定メンバーである。当日の運営の手伝いはおもしろ市実行委員会と駐車場や車の誘導整備をする下関校下交通安全協会であり、約100人程度が動くという。

中井さんと小嶋さんの話によると、おもしろ市は当初から連合自治会が関わっていたわけではなく、最初に始めたのもほとんどが下関以外の方々だったそうである。今のおもしろ市の原型は全国各地の寺の門前で開催されている「骨董市」であり、瑞龍寺もおもしろ市が始まる前から門前で骨董市を開いていた。平成4年、「地域の活性化に」という目的で助成金が提供されたことをきっかけに、瑞龍寺保存会の方と、その方と繋がりのある人物が下関に住む有志数名を巻き込んで現在のようなおもしろ市を始めた。そのような形態で何年間かおもしろ市を継続し、平成20年には下関連合自治会に協力してほしいという依頼があり、活性化行事委員会の役員、委員を各町内から選抜し、その後から下関の住民がおもしろ市の運営に大幅に関わるようになったそうである。

元々は校区外で始まったおもしろ市だが、中井さんや小嶋さんの語りからは下関の住民達が積極的に関わっている様子が伺える。また、おもしろ市はライトアップとは違い、運営にあたっているほとんどの人が下関に住む人々であるため、ライトアップに比べて「校区のもの」という意識が強いと中井さんは語った。

これまで分析してきたように、地域住民である下関連合自治会は、ライトアップでは当日に運営の手伝いをする大きな役目を任されているとともに、おもしろ市の企画運営を通して、ライトアップの時期以外の瑞龍寺周辺の活性化に寄与していると言える。

第4項 富山県福祉旅行センターの取り組み

まち衆会のメンバーであり、瑞龍寺周辺の地域住民である伏江さんは瑞龍寺のすぐ近くで富山県福祉旅行センターという旅行会社を経営しており、2000年に当時は全国に22しかなかった「まちの駅」を全国で初めて民間主導で八丁道沿いに開いた。まちの駅たかおかでは、懐石・精進料理を楽しむことができたり、小物などのお土産を購入することもできる。

当時伏江さんがまちの駅を立ち上げたときは国宝になったにも関わらず、休憩するスペースがなく、トイレをする場所がなくお土産を買うこともできなかつたと伏江さんは語った。地域住民であり駅南で旅行会社を営する伏江さんは、その状況を見かね、観光客が駅南に来て経済を回すことで駅南を元気にしたいという思いから、国宝指定から3年目にまちの駅を立ち上げ、福祉旅行センターで経営をするようになった。今は3分の1がお土産などのギャラリーで、3分の2は精進料理を提供する店にスペースを貸しているそうである。

まちの駅の立ち上げについて伏江さんは以下のように語った。

私がたちあげたときは民間主導で。たちあげたときは全国に22しかなかったかな。ほとんど補助金があつて。どこでも助成金がないとやらんといっぱい。私の場合はぱつとやろういうてお金だして。

当時、全国のまちの駅は立ち上げの際そのほとんどが補助金に頼っていたそうである。しかし、伏江さんは「やろうと決めると自分でお金を出して」まちの駅を開いたそうである。補助金に頼らず、民間の力で観光客向けのスペースを開いたというのは、まちを元気にしたいという伏江さんの思いがとても大きなものであったことが見てとれる。

観光地化をするにあたって、休憩するスペースは観光客へのホスピタリティにかかせないものであると考えられるため、福祉旅行センターによって開かれたまちの駅は観光客が安心してゆっくり観光ができるような空間づくりの一步になったのではないかと。

第6章 考察

第1節 勝山との比較

勝山の事例では、「町並み保存地区」として指定された後に、行政が「町並み保存地区整備事業」として、「第一次整備事業」「第二次整備事業」の二回に分けて整備事業を行った。捧の分析より、第一次と第二次ともに、期間と予算、指定区域を定め、行政が計画的に町並みの整備事業を進めたことが分かる。そして、行政が行ったハード面の事業を舞台として、住民たちによるソフト事業が展開された。このようにして、勝山では行政によって計画的に事業が展開され、観光地化が進められた。一方、高岡の駅南地区では、勝山のように行政による町並み全体を整備するような大きな計画はなく、国宝指定後に瑞龍寺周辺で実行されたハード面の事業は、「瑞龍寺道」の舗装と、高岡駅から瑞龍寺までの道路の灯籠の設置、まちの駅の開設が挙げられる。瑞龍寺道は、南活が高岡市に要望書を提出したことで、高岡市が行った整備事業である。灯籠の設置は、まち衆会が個人や法人からお金を集めて行った事業である。まちの駅は、まち衆会の伏江さんの会社が開いた店である。この3つの事例に共通することは、行政側からでなく、民間側からの要望や発信で実現した事業であるということである。勝山と比較して、駅南地区では行政による計画的なハード面の事業はなく、民間側からの発信や要望で瑞龍寺周辺の整備が行われていることが特徴である。このような計画性に乏しい条件の中でも、ある程度観光地化が進んでいるのは何故なのか。二節では、長谷の観光振興を成功に導くための10の条件との比較を通して駅南地区の観光振興について整理していく。

第2節 観光振興を成功に導くための10の条件との照合

第6章第1節では、勝山と比べて駅南地区は観光地化に向けた大きな計画の下で観光振興が進められているわけではないことが明らかになった。さらに、これまで分析してきたように、駅南地区には駅前町が元々あったわけではなく地域住民の遊び場だったために、国宝というネームバリューと比べると周辺の観光地化が進んでいない状態からのスタートで観光振興を行っており、その状況の中で、周りの様々な団体が行政による大きな計画のない中言わば「行き当たりばったり」のような形で駅南地区の観光振興を進めてきた。それでは、大きな計画のない中で、なぜ駅南地区がある程度の観光地化を進めることができたのか、第2章第2節先行研究で取り上げた長谷（2003）の、観光振興を成功に導くための10の条件を高岡の瑞龍寺ライトアップと照らし合わせながら考察していくことが明らかにしていく。

まず、「リーダーの存在」であるが、駅南地区の観光振興に対するこれまでの取り組みを振り返ると、駅南地区においては、リーダーは一人ではなく、多方面でリーダーがいることが分かる。例えば、ライトアップでは石崎さんが中心となってイベントを進めている一方で、おもしろ市では下関校下活性化行事委員会の会長中井さんが実行委員会の会長としておもしろ市の運営にあたっている。また、ライトアップを大規模なものにしようとした南活の元会長も、石崎さんが地域に対して熱い心を持ち、お金を出す「旦那」のような人だと言っていたことから地域におけるリーダーであったことがうかがえる。さらに、下関校下連合自治会長の元会長である小嶋さんも、石崎さんが小嶋さんに対して「小嶋さんがいてくれたから地元の人たちが参加してくれた」と評価していたことから、小嶋さんは地域住民をまとめるリーダーであることが分かる。このように、駅南地区では様々な場面でリーダーいることが分かる。それぞれが関わっている内容は違うが、これまでの調査で明らかになったように駅南地区を盛り上げていきたいという想いは同じで、それぞれの取り組みが駅南地区の活性化に繋がっていると言える。様々な場面で活躍するリーダーがいることで、ライトアップで合理的にネットワークを形成しやすく、結果として多くの人々がライトアップに関わることが可能になっているのではないかと推測される。

また、長谷によると理想のリーダー像は「地域に対して誇りと情熱を持って未来へに展望を抱き、卓越した想像力と果敢な行動力を兼ね備えた粘り強く尊敬される人」をあげているが、上で述べたそれぞれのリーダーは、地域に対して誇りと情熱を持った人物であることは関係者へのインタビューで明らかになった。それぞれのリーダーに対して詳細なアプローチはできていないが、長谷が述べるリーダー像と一致していることが推測できる。

次に、「地域住民の理解と協力」について考察する。ライトアップでは、地域住民である下関地区の人々は主に当日のボランティアとして活動する。地区内のそれぞれの町から、2,3人程度、割り当てられた人数が当日ライトアップに出向き、境内の警備や来場者の誘導・整理を行う。高齢化が進む下関地区の人々にとっては長時間外に立ち続けることは体に負担がかかることや、5月と10月のおもしろ市も重なって忙しい等の理由で、下関地区の

住民のすべてがライトアップに対して積極的であるとは決して言い切れないと筆者は考える。だが、観光駐車場での瑞龍寺と住民とのやりとりやおもしろ市など、ライトアップ以外の場面で瑞龍寺と住民の間で信頼関係を形成していく中で、「瑞龍寺のためなら」、「瑞龍寺を守らなければならない」、「お互い様」という意識が芽生え、住民側でもローテーションを組んだりなどの工夫をし、一定の理解を示しながら最大限の協力をしていると言える。

以上のことから、地域住民の協力を得るには当事者同士の信頼関係もしっかり形成されていることも重要であると言える。

「地域資源の発見と活用」については、瑞龍寺という文化財が国宝に指定されることで発見された観光資源をそのまま観光に活かすのではなく、光を照らしたりプロジェクションマッピングを行ったりなど、現代の技術を使って瑞龍寺を引き立たせている点で、瑞龍寺に付加価値を加えて工夫をしている点でこの条件はクリアしていると言える。だが、毎年同じようにライトアップをするだけではマンネリ化してしまうことが懸念されるため、新しい視点で瑞龍寺に付加価値を加えることを検討すべきである。

「アイデアの収集」についてはライトアップの企画内容を考える事務局会議に参加するのは、石崎さんを初めとする協和総商と新聞社、テレビ局が主で、長谷の「広く一般にもアイデアを求める」という点には当てはまらないことが分かる。また、石崎さんは事務局会議においては「毎回活発な意見交換が出るというわけではない」と語っていたことなどから、アイデアの収集という点では、瑞龍寺ライトアップはまだ不十分であると言える。瑞龍寺の特徴を活かした、他にはないような企画を広く一般市民にも求めることが必要である。そのことが、「地域資源の発見と活用」の考察で浮かび上がった「マンネリ化」という問題を切り抜ける契機になると言えるのではないか。

「娯楽性の要素の重視」については、瑞龍寺をライトアップしたり、プロジェクションマッピングをしたりなどの「遊び心」があると言えるので、この条件は満たしていると考えられる。

「ホスピタリティの提供」については、まちの駅のような休憩所があったり、高岡駅から瑞龍寺まで灯籠が建てられていることや、新高岡駅から瑞龍寺までの瑞龍寺道の整備など、ハード面でのホスピタリティは進められている。ソフト面でのホスピタリティは、勝山の事例で取り上げた「頼山亭」での住民によるおもてなしのような事業は、イベントの時以外でのおもてなしは本論文では明らかにできなかったが、ライトアップにおいては地域住民である食生活推進協議会による龍玉だんごの配布や、以前行われた薬膳粥のふるまいがそれに相当すると考える。

「リピーターの考慮」については、春、夏、冬の3回とも光の演出を変えているわけではないと石崎さんが語っており、毎回のライトアップでの主な違いは大茶堂で開催される併設展の内容のみであることが伺え、ライトアップではなく併設展を観に来ている人がどのくらいの割合であるかは分かっていないが、多くはライトアップ自体を観に来ている人が多い場合は、ライトアップの演出自体に再訪してもらえるような工夫が必要である。た

だ、春のライトアップは2015年からプロジェクションマッピングの演出が追加されたので、この点はリピーターを獲得する大きな呼び水になったのではないかと予想される。夏と冬は予算が少ないこともあり、未だマンネリ化を切り抜けられていないことが伺えるため、予算が少ない中でも何か工夫を考えなければならないのではないかと考える。

「地域内自給率の向上」については、ライトアップの光の製作は高岡の会社、プロジェクションマッピングの製作は富山県の会社、ライトアップ中の曲の製作は高岡出身の作曲家が行っている。石崎さんの語りによると、できるだけ地元の人を使いたいと言っていたことから、主体にもライトアップの需要は地域内で賄おうという認識があることが伺える。ライトアップで具体的にどれ程の経済効果があるかは本論文では検討できていないが、地域内需給しようという意識を今後も持ち続けることは駅南地区の活性化に向けて必要であろう。

「観光マーケティングの知識」については、長谷は地域住民に観光マーケティングの教育・研修を急がなければならないと述べているが、このような教育や研修を受けた者は本論文の調査では明らかにできなかった。ただ、町衆会の伏江さんは、旅行会社を経営しており、瑞龍寺を核とした観光プランを開発し商品にしていることから、観光マーケティングの知識に精通している人物と言ってよいだろう。

「専門家の活用」については、これまでの調査ではライトアップには観光の理論と実践に精通した「専門家」が実行委員会に入っていないことが伺えた。観光の知識に卓越した外部の第三者の視点からライトアップを捉え直し意見として取り入れることが重要であろうと考えられる。

以上、瑞龍寺ライトアップを中心として、駅南地区の観光に対する取り組みと長谷が述べる10の条件との比較を行ってきたが、多くの組織が関わるライトアップでは、それらをまとめるリーダーが必要であることや、元々は観光地ではなかった瑞龍寺において足りない資金面や人材面などを補うために、合理的にネットワークを形成する必要があったことから、長谷のあげる10の条件のうち、瑞龍寺の事例では特に「リーダーの存在」が重要であると筆者は考える。リーダー以外の条件については、上で考察したようにまだ完全に満たしていないものがあるので、ライトアップはまだ伸びしろのあるイベントであると考えられる。

第3節 まとめ

全国にある観光地として有名な寺は元々門前町があったり、観光寺として既に整備されているなど観光地として成立しているものが多い中で、瑞龍寺には昔ながらの門前町のようなものはなく、国宝指定後も休憩するスペースがなく、お店も2,3件しかなかった。観光地としての整備が進んでいないどころか、地域の子供たちにとっては「近所の遊び場」であった場所が国宝に指定されたことで突然観光地になったという点においては極めて稀な例である。また、勝山と比較で明らかになったように、駅南地区は国宝指定後も、観光地化に向けた行政による計画的な事業は見られず、「行き当たりばったり」の整備事業がまばらに行われている。そのような様々は背景が絡み合い、瑞龍寺周辺は国宝というネームバリューに比べると、それほど観光地化が進んでいないようなアンバランスさが残っている。しかし、そのような条件の中、瑞龍寺を始めとして、南活、まち衆会、地域住民という性質の異なる組織が、駅南地区の活性化のためにそれぞれのリーダーを介して合理的にネットワークを形成してきた。これらの組織は、駅南地区の観光振興のためそれぞれの性質を生かしながら自分達ができることを行い、できないことはお互いに補い合うことで、駅南地区の観光地化を進めた。

「遊び場」だった瑞龍寺は、今はライトアップを始め様々なイベントを行い、観光客を呼び込む「観光地」になった。年によって変動はあるものの、瑞龍寺は毎年20万人前後の観光客を呼び込んでいる。善光寺などの全国の有名な寺に比べるとその数は少ないかもしれないが、この数字は高岡市の主な観光スポットの中では3番目に多い数であり、観光地ではなかったという経緯をふまえると、瑞龍寺は観光地ではなかった場所を観光地として成立させた成功例といってもよいのではないか。2007年に「瑞龍寺年間100万人キャンペーン」としてかかげた瑞龍寺に年間100万人をよびこむという目標にはまだ及ばないが、富山県内唯一の国宝であるという瑞龍寺の大きな強みと、これまでライトアップを継続してくる上で広がった幅広いネットワークは、駅南地区の観光振興のポテンシャルを感じさせる。これらの強みをこれまでの経験を活かしてうまく利用することで、これからますます瑞龍寺を核として駅南地区に人々を呼び込む可能性があると言えるのではないか。

注釈

注1：2016年5月21日、6月18日、7月14日、2017年8月18日。このうち2016年5月21日と6月18日は博労町まちなかサロンにて、7月14日は林さんと合同で協和総商にて、2017年8月18日は協和総商にてそれぞれ1時間程度インタビューを実施した。

注2：現在は、3分の2を精進料理を営む他団体に貸し出している。

注3：八丁道おもしろ市の詳しい概要については第6章第4節第3項「下関校下活性化行事委員会の取り組み」で記述する。

注4：小嶋さんと中井さんの話によれば、この頃に自治会がライトアップに関わっていた覚えはないと語っており、地域住民がこの頃から関わりだしたかは不鮮明である。

参考文献・URL

- 大脇史恵、2015、「観光の振興およびそれを推進する組織に関する一考察」、静岡大学経済研究 20(2)、25-39
- 公益社団法人高岡市観光連盟 高岡市観光交流課,2017,「高岡市観光ポータルサイト たかおか道しるべ」(<https://www.takaoka.or.jp/viewpoint/archives/878>)
- 国宝瑞龍寺 春のライトアップと門前市 <http://ecchu-takaoka.com/>
- (社)真庭観光連盟,2017,「勝山・町並み保存地区」(<http://cms.top-page.jp/p/maniwa/3/3/25/>)
- 瑞龍寺ライトアップ実行委員会、2010、『国宝瑞龍寺ライトアップの流れ』
- 末広開発株式会社,2017,末広開発株式会社-活力あるまちづくりを推進しています- (<http://www.suehirokaihatou.co.jp/>)
- 高岡市,2017,「第3期中心市街地活性化基本計画」, (<http://www.city.takaoka.toyama.jp/shogyo/sangyo/shintakaokaeki/chushinshigai/kekakutop/houkoku-03.html>)
- 高岡南部地域活性化推進協議会(<http://takaoka-nankatsu.org/>)
- 高岡南部地域活性化推進協議会、1991～、『定期総会』
- 高岡町衆サロン,2017,「集いの駅 まちの駅たかおか」 (<http://takaoka-st.jp/index.php?id=2101>)
- 2006 事業紹介[国宝瑞龍寺/これまでの経緯] (http://www.senmaike.net/takaokalight/syoukai02_2.html)
- 長谷政広、2003、『新しい観光振興--発想と戦略--』、同文館出版株式会社
- 八丁道おもしろ市実行委員会,2017,八丁道おもしろ市 (<http://www.omoshiroichi.com/>)
- 捧 富雄、2006、「観光による地域振興の推進における地域行政体と住民の役割分担とその連携要因：旧勝山町における事例研究」、岡山商大社会総合研究所報 27